

【読楽】030 「婚礼往来」を読む * 読楽箇所=本文全文



「婚礼往来」の概要 * 『往来物解題辞典』一部改編

〈天保新刻〉婚礼往来

【作者】不明。

【年代】天保4年(1833)以前刊。[水戸]茗荷屋弥兵衛ほか板(初板)、また別に[江戸]和泉屋市兵衛板(後印)等あり。

【分類】社会科。

【概要】異称『万歳婚礼往来』。中本1冊。婚礼について要用の事柄を記した往来。冒頭に、婚姻の大切さや分限に応じた婚礼儀式について述べ、続いて「結納」「嫁入」「婚礼」「見参」の順に、身分の違いにも触れながら式・膳の次第などについて比較的詳しく説く。本文をやや小字・6行・付訓で記す。巻頭に婚礼(式三献)等の図、頭書に「祝言床踏之事」「齒黒之事」「文字の濫觴の事」「琴のはじめの事」「碁・双六初の事」「雖遊之由来」「貝合せの事」「機織之由来」「縫針之事」「五節句之由来」「七夕歌尽し」を掲げる。

【所蔵】謙堂・小泉・東博・東大・東大国語・玉川大・日大・三次市図(半紙本・初刷・口絵色刷)ほか。

【影印・翻刻】『往来物大系』75巻／『往来物分類集成』R35／『日本教科書大系・往来編』6巻／『〈絵図集成〉近世子どもの世界』2巻。



「婚礼往来」を読む *本文約2300字。

〈天保新刻〉婚礼往来 *和泉屋板の原題簽。傍書「四民日用／誤字改正」。見返題「万歳婚礼往来」。

婚礼往来

婚礼と分限

夫、婚礼之式法、有増之分申入候 畢。抑、男女新婚之事者、一代一度之大礼、諸事 嚴二可祝事なり。其法式、左二躰すと雖、兎角分限に可応事肝要也。

結納と結納品

先、結納之事、下俗二而者「頼」と云。唐土二而者「納采」又「納徴」とも云。上輩は練小袖^{*1}縫箔^{*2}一、唐織^{*3}一、板之物^{*4}一、惣箔^{*5}一、幸菱^{*6}白綾^{*7}一、以上三重与、樽肴^{*8}者七荷七種^{*9}なり。中輩者、練、板之物、縫箔幸菱、以上二重与五荷五種也。下輩者、白小袖一色与一重、三荷三種也。今卑賤之方に者、畧而、樽・寿留女・苧帯^{*10}代金二而取計茂有之。舅より聳之方え茂同格之祝儀可有処、今者、從舅之祝儀無是者、頗似非礼也。唯、応分限而樽肴にても可遣也。



扱、此時之小袖、台二積様者、如常積而、不返袖法式也。嫁入之夜二至候而者、自聳方小袖一重、衿与衿、合せ糸二而綴之、可遣。是、「迎小袖」と云。

輿入れ

嫁之輿來時、門前二筵を敷、家之長出而筵之上に輿を為居（据）、互二祝儀を述、自夫、此方之役人、輿を請取べし。貝桶添而來時者、輿之次二可請取也。門内左右二而火を焚。是を「庭之続明」と云。

又、妻戸^{*11}之前、左右に白を居、左右共男女二人宛二而輿を通し、左之方之餅を右之方二移し、一にして搗を「突合之餅」と云。又、妻戸之際之左右二点蠟燭、輿之通たる跡にて左を右へ渡し、真（芯）と真を合而消を「紙燭指」と云。是等者、高貴之用給ふ式法成故、平人之所作に非ずと雖、先、其式法如此。

婚礼当日の準備等

婚礼之夜、女より夫え持参之物者、小袖一重上下一具、帯一筋、扇子、畳紙^{*12}等也。是者、俗二鼻紙之事也。又、脇指一腰添茂有之。右、広蓋二居而可出。乍併、是等二限二茂非ず。分

*1 練小袖＝練貫。縦糸に生糸、横糸に練り糸を用いた平織りの絹織物。打掛の下に着る絹の着物。
 *2 縫箔＝刺繍と摺箔(金銀の箔を押しつけた布)を併用して布地に模様を施したもの。ここでは縫箔を施した豪華な表着の小袖。
 *3 唐織＝色糸に金銀を交えて絵文様を織り出した豪華な織物。中国風の多彩で厚く刺繍が入った小袖。
 *4 板之物＝板を芯に平たく巻いた絹織物。
 *5 惣箔＝金箔模様が全面的に施された小袖。
 *6 幸菱＝装束文様の名。花菱を組み合わせた纂文で、先間菱、先間菱(先剣菱)とも。吉祥名として「先間」に「幸」の字をあてた。
 *7 白綾(しろあや・しらあや)＝白地の綾織物。白の絹小袖。
 *8 樽肴＝進物としての酒樽と酒のさかな。
 *9 七荷七種＝酒樽7組と肴7種。一荷は天秤棒で担う前後二つを指すので、七荷で一斗樽7組(14樽)。肴七種は、昆布・するめ・塩鯛・串鮑・鯉節など7種。一般的に、七荷七種は上輩の場合で、中輩は五荷五種、下輩は三荷三種(以下)。中流以下の庶民は、「手樽の酒」「少額の金」「木綿二反」「肴(ごまめ*干したカタクチイワシに味付けしたもの)」といった簡素なもの。
 *10 苧帯＝麻の帯。苧は麻の古名。
 *11 妻戸＝家の端に設けた両開きの戸。
 *12 畳紙＝折り畳んで懐中に入れ、鼻紙や詩歌の詠草などに用いる紙。懐紙。

相応可然也。

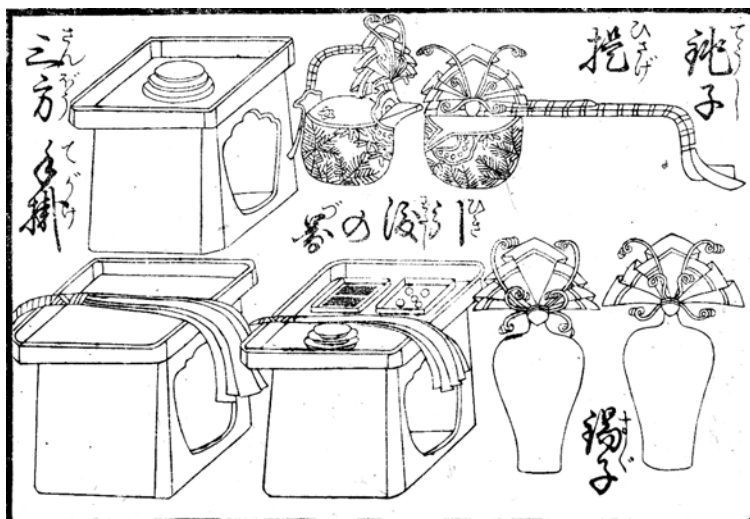
嫁之出立者、下着白小袖、上着幸菱之白小袖、白練^{*13}之袷を被、此袷、則、腰巻^{*14}二可致也。

夫婦の道具飭事、婚礼前日、両方之女中可飭也。

婚礼座配之次第者、待女藹^{*15}出向而、嫁を誘引し化粧之間にて暫休息為致、座敷二着せ、尤も、夫は客座、嫁は主位二可座也。主位与ハ勝手之方二而、亭主分之座付也。座定而後、手掛^{*16}を出し、待女藹愛度挨拶有之、熨斗・昆布・勝栗を取、夫婦二可祝。

其後、女中二人出而、床之瓶子を取、下座に下り、又、酌人二人、銚子・提を取、下座に可下。扱、瓶子之女蝶を取、仰向置而、酒を提へ移し、又、男蝶を取、女蝶之上二重ね、是も酒を提え移、扱、提より銚子へよき程に移し、銚子・提を酌人銘々に扣て待べき也。

鳥飼醉雅編、天保12年再刊『女芸文三才図会』1巻より



三三九度

扱、引渡^{*17}を出し、夫婦・待女藹居る也。其時、本酌^{*18}之人、三ッ盃^{*19}を夫之前え可持参。夫、其上之盃を取、二献飲時、提より銚子へ可加酒也。夫、一献加へ飲而三献也。

其盃を嫁へさす。介添之女歟、待女藹、盃を取、嫁へ出す。嫁一献飲之、おなじく加へ、三献飲而後、初之如く床へ直し可置也。打身^{*20}を出し、引渡之右之方に居る也。酌人立而三盃を此度者嫁の方え可持参也。嫁、第二之土器にて三献飲。加へやう如始。其盃を本座^{*21}二置而、酌人可下也。

扱、綿煎^{*22}を出し、左之方に可居也。酌人、亦三盃を夫へ持参す。夫、第三之土器にて三献飲加へ、始之如し。又、嫁之方へさす。嫁三献飲而納る也。是二而三々九度也。盃を本座に飭り、右に居置たる三之膳を取也。

世間之礼法二嫁より飲初而、夫えさすと云事、為非礼故、高貴二者無之事なり。下俗にては女之方より飲始、夫へ指。夫、亦第二之盃二而飲始、女へ指。三度迄是を取遣し、祝儀を済す事也。扱、夫より三々九度納而、夫者座を立、可休足（息）。

*13 白練＝白い練絹(生織物を精練して柔軟性と光沢を持たせた絹布)。

*14 腰巻＝女性が和装するとき、下着として腰から脚にかけて、じかに肌にまとう布。

*15 待女藹＝待ち女郎。婚礼のとき、戸口で花嫁を待ちうけて中へ導き、付き添って世話をする女性。待ち女房。

*16 手掛＝蓬莱飾り。関西で、新年の祝儀の飾り物の一。三方の盤の上に白米を盛り、熨斗鮑(アワビ)の肉を薄くはぎ、長く伸ばして干したもの・搗栗(栗の実を殻のまま乾かすか、火に当てるで乾かしたものを、臼で搗いて殻と渋皮を取った食物)・昆布・野老(ヤマネイモ科の多年草トコロ)・馬尾藻(褐藻類ホンダワラ科の海藻)・橙・海老などを飾ったもの。江戸では「食い積み」と呼んだ。蓬莱山。

*17 引渡＝本膳に杯を三つ添えた膳部。

*18 本酌＝婚礼等の宴席で酌をする人。これを補佐する「加え(酌人)」に対して言う。

*19 三ッ盃＝三組杯・三組盃。大中小の杯を三つ重ね一組としたもの。結婚などの儀式に用いる。三組の杯。

*20 打身＝刺身。

*21 本座＝本来の座席。

*22 綿煎＝腸煎り。コイの内臓を味噌または塩と酒を加えて煎り煮したもの。

扱、鱧の吸物出て、侍女藤、局^{*23}杯献々有之。土器一ッ小角^{*24}にのせ、三方二居、勝手より可出之。然而、取肴可有。是を過て色直也。夫者、嫁之持参之小袖を可着。

雑煮并吸物出て、盃は金銀の土器二而、嶋台二而茂可差出。銚子も金銀之蝶二替て有献々。侍女藤、押之肴^{*25}を夫婦へ参せ、扱、法式之湯漬^{*26}を出し、鯉之吸物出て盃も塗盃二而爛酒也。爰二而饗膳^{*27}之儲可有也。扱、十二組之菓子・茶杯出、本膳を出す。七五三^{*28}、五々三、三五、三二可応其分限。

舅姑と新婦の盃事(舅姑盃)

右之祝儀済而、侍女藤、嫁を誘引し、舅姑二令見参。下俗二而八、直に婚礼之序二舅姑二令見参也。扱又、夫より小舅二至る迄相応之祝儀可有也。手掛・三盃を出し、引渡者舅・姑・嫁三人二居る也。扱、舅三献飲而、嫁にさす。嫁二献飲時、舅より引出物可有也。嫁、三献飲而、舅え返。舅三献飲而納也。爰二而打身を出す。平人者、雑煮を可出。亦、姑第二之盃二而三献飲而、嫁え指。嫁二献飲時、姑引出物有。嫁一献加へて姑へ返す。姑三献飲而納也。爰二而綿煎りを出す。平人者吸物也。又、第三之土器二而嫁一献飲て舅へ指。舅三献飲而嫁へ返す。嫁二献飲而姑へさす。姑三献飲納也。是二而何れ茂、三々九度也。小舅其外有之者、又、吸物を出し土器一ッ三方二居而出。献々可有。取肴可出也。若、夫の父母無之時者、夫婦を誘引、父母之位牌へ見参可為致也。

聳入ほか

扱又、聳入者、二重手掛、置鳥・置鯉^{*29}、饗膳等之飭、長持二入、舅之方え遣し、五百八十之餅^{*30}を行器^{*31}に入可遣也。半切^{*32}杯え入事非本式也。行器者、如何程二而茂入遣可。祝儀者、舅へ小袖・太刀、姑え小袖、其外小舅迄相応二可遣也。

先、手掛を出し、引渡・三ッ盃出而、舅三献飲、聳へ指す。聳、二献吞時、引出物可有。聳一献加て舅へ返す。舅、三献飲而納る也。扱、打身を可出。平人者、可為雑煮。次二姑三献飲ミ、聳へさす。聳三献飲而、姑え返す。姑三献吞納る也。爰に而綿煎を可出。平人者、吸物也。扱聳三献飲而、舅えさす。舅三献飲而納る也。酌者右に同。扱、吸物二而茂、惣引渡二而茂出而、一ッ盃二而献々可有。

次二本膳出す也。舅入之式も聳入与同格也。只々婚礼者、時之宜敷二随ひ、兎角可為分相応事専要也。

仍而、概記畢。又々、欠略有之事、追而、可申入候。謹言

*23 局＝私室として、仕切りへだてた部屋を与えられている女房。

*24 小角＝食器を載せる食台の一種。四角でその周囲に低い縁を付けた方盆。サイズによって名称が異なり、8寸(約24cm)四方を「大角」または「八寸」、5寸(約15cm)四方を「中角」、3寸(約9cm)四方を「小角」と言う。

*25 押之肴＝押え物。酒宴の最後に出す、花鳥・山水の作り物の台の上に肴を盛ったもの。

*26 湯漬＝湯をかけた飯。湯漬け飯。

*27 饗膳＝もてなしの料理の膳。ごちそうの酒やさかな。

*28 七五三＝七五三の膳。七五三の数にちなんで、本膳に七菜、二の膳に五菜、三の膳に三菜を出す祝儀の馳走。このうち、七の膳を略して五の膳としたものが五五三で、本膳に飯を入れて5種、二の膳に5種、三の膳に3種の料理を出すもの。以下も略式の膳。

*29 置鳥・置鯉＝置鳥は、近世、祝宴、特に婚礼の席などの飾りとした雌雄の鳥。置鯉と対をなす。置鯉は雌雄の鯉。

*30 五百八十之餅＝行合の餅。江戸時代、婚礼の3日後に、婿・舅の双方でともに餅を搗き、580(あるいは587)に丸めて込(わらむしろを二つ折りにし、縁を縫いとじた袋)に入れ、使いに持たせてやり、互いに祝う餅。皆子餅。五百八十の餅。

*31 行器＝外居とも書く。食物を戸外に運ぶのに用いられた木製の容器。くり物、曲げ物、桶づくりがあり、形は多く円筒形であるが角形もある。

*32 半切＝盥たらい状の浅くて広い桶おけ。半切り桶。

■婚礼の流れ——堀田連山・文化10年(1813)『絵本婚礼道しるべ』ほか

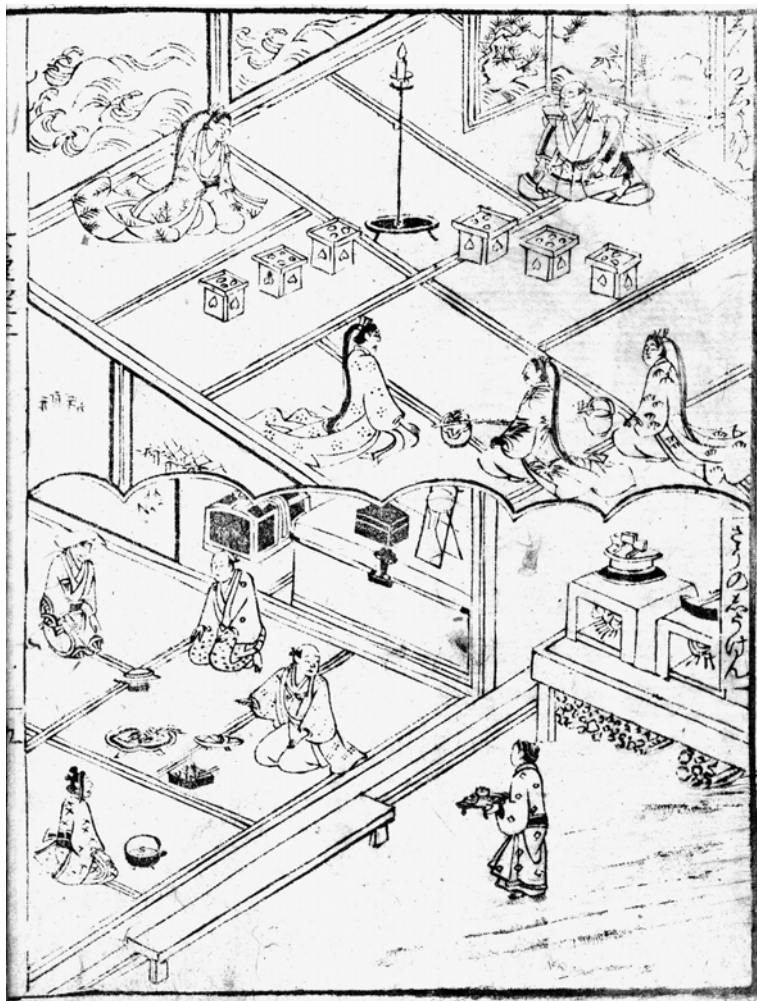
*丸付数字は図録の記事番号、本書以外の記事は【 】に出典を示した。

- 1) 見合①……*仲人を立て吉日を選ぶ。供を連れた男女が茶屋などで遠目から互に見る【女雑書教訓鑑】
- 2) 結納②……婚姻が決まった後に婿方より金品を贈る。結納・結納。ゆいれ たのみ*結納品は、白銀・白綿子・緋縮緬・紅梅・綿・熨斗・鯉・昆布・鯉節・鯛・御樽の11種以下、9種・7種・3種(百人一首(江戸後期))
- 3) 結納披露目・衣装振舞(部屋飾)……結納品や衣装・婚礼道具等のお披露目【女寿蓬莱台・嫁入談合柱】
- 4) 嫁入道具搬入③……嫁入の一両日前(古くは婚礼当日)に婚家へ搬入。
- 5) 嫁入④……式三献(本来は3種の膳毎に3種の盃を飲む儀式)で門出を祝った後、嫁が輿に乗って出発(嫁入道中)。
- 6) 打合の餅・紙燭指……しよくさし つまど妻戸(両開きの扉)の前の左右に臼を置き、男女二組(貞丈雑記によれば老夫婦)が餅を搗く。その間を輿が通過したら左の餅を右へ移して一つに搗き合わせる。また、妻戸の側で左右に紙燭(松の棒を加工した松明)をとす2人の間を輿が通過したら、左を右の芯と芯を合わせて火を消す【女五常訓】*近年は遠慮して行わない【婚礼仕用罌粟袋】*極めて高貴の礼で、平人の所作ではない【女文台綾囊】
- 7) 皆子餅……打合の餅(合わせてから三杵半搗く)から360個の丸餅を作って嫁の実家に贈る【女雑書教訓鑑】*580(あるいは587)個の皆子餅は江戸期の慣習で故実に非ず【貞丈雑記】
- 8) 祝言献立……種々式法あり。慣れたる人に尋ね合わすべし。
- 9) 祝言座敷⑤……婚家の縁側に輿を付け、待女郎の案内で控え室へ移動し、三三九度の盃事(種々の式法あり)。
- 10) 式三献(三三九度)……三ッ組の盃で3回ずつ酒を飲み交わす(固めの盃)。*婚礼の座付きや盃事はさして金銀の費えがないため本式で行いたいものである【女小学教訓】
- 11) 色直⑥……式三献の後、婿方が用意した小袖に着替える。*式三献を終え、銚子や膳を食した後、婿方より色直の小袖を遣わす。貴人は御帳台みちようだいに入って召し替える。平人はその場で白無垢の上着を取って色直の小袖を打ちかける【女訓用文都錦】
- 12) 舅姑盃……色直後に、花嫁が舅姑と対面し挨拶(その後、祝宴となる)【女今川教玉章】
- 13) 部屋入の盃⑦……新婚初夜に寝室で新郎新婦が盃を交わす(床盃) *江戸期の流行で故実に非ず【貞丈雑記】
- 14) 部屋見舞⑧……*嫁入の翌朝、嫁方親類の女性達が贈物を持参し、婚家親類の女性達へ順次挨拶【女寿蓬莱台】
- 15) 五日帰(花帰)……嫁入から5日目の嫁の里帰り。5日滞在後、土産物を持参し婚家へ戻る【女寿蓬莱台】
- 16) 里見舞・婿引出物……嫁が実家に帰った翌日、婿方の親類から里見舞(贈物や料理)が届く【女寿蓬莱台】*婿の引出物については貴人には細かい作法があるが、町人は都合の良い引出物で構わない。中には気張って形見になるような引出物を贈る者もいるが、子孫相続の為の祝言であるから、祝儀は軽くし家の存続を計るのが町人の婚礼の至極である【女訓用文都錦】
- 17) 打上(内上・内揚)……新婦里帰(五日帰)に同行した新郎が姑(新婦の母)と初めて対面する儀式【嫁娶重宝記】
- 18) 膝直……婚礼後、舅方に両家一門を招いて饗応(乱酒乱舞の大騒ぎ、芸尽くしやら無礼講やら…)【女寿蓬莱台】
- 19) 聳入⑨……婚礼後に新郎が初めて新婦の実家を訪れ、挨拶する。



色直し後は 教えねど 承知なり(溪斎英泉画『神事行灯』3編)

■武家と庶民の婚礼(真の祝言・草の祝言)



【上段=江戸前期】

元禄5年(1692)刊『女重宝記』

(苗村丈伯作)

【下段左=江戸中期】

宝暦13年(1763)刊『女小学教艸』

(北尾辰宣画)

【下段右=江戸後期】

弘化4年(1847)刊『絵入日用女重宝記』

(葛飾応為画)

●不自由な武家の結婚

武家諸法度で「国主・城主・一万石以上ならびに近習、物頭ひそかに婚姻を結ぶべからざる事」とされた武士の結婚には種々の制約があった。例えば幕臣(旗本・御家人)の場合、他大名の家臣との縁組や幕臣同士・同じ役職同志の縁組、農工商との縁組が禁止されていた(養子・養女の抜け道はあった)。

